りびんぐらいぶず　平成 26（2014）年6月第1号

弥陀佛の本願を憶念すれば

◆ご讃題

弥陀佛の本願を憶念（おくねん）すれば、自然（じねん）に即のとき必定（ひつじょう）に入る。ただよくつねに如来の号（みな）を称して、大悲弘誓（ぐぜい）の恩を報ずべしといへり（Ref『正信偈』龍樹讃　註釈版聖典 P205、『浄土三部経と七祖の教え』P116）

◆はじめに

お正信偈は、私たちが慣れ親しんだお聖経です。この程しばらく外界とは無縁の境界で過ごす間に、その読み下し文を目で追いつつ、朝夕のお勤めを致しておりますと、日頃、放置してきた課題が鮮明になって参ります。

その一つがご讃題であります。これは、親鸞聖人が七高僧の第一祖龍樹菩薩をお讃え下さった讃文です。これについてものの本に、**信心正因　称名報恩**の根拠だと紹介されています（Ref①勧学寮編『浄土三部経と七祖の教え』P116）。

そこには次のように紹介されていました。

「信心を得たものがまさにその時、正定聚に入るのであれば、阿弥陀仏の本願には信心と称名とが誓われているけれども、称名をまたずに正定聚に住することになる。とすればその上の称名は、すでに救いに与った身の上として行う報恩の行に他ならない。すなはち、浄土真宗の宗義である「**信心正因　称名報恩**」の義もまた、龍樹菩薩の教えの上にその根拠を見いだし得るのである」と。

書物は、別科の教材として平成二十一年七月刊行の新しいものですから、筆者は、註釈版を繙きつつ繰り返し拝読してきたのですが、このように些か恣意的なお導きを戴きますと俄には首肯し難いものを覚えてしまいます。恐れながら教材としてお取り上げになるのなら他に有力な解釈がないかどうかをも押さえた上で客観的にご案内戴き宗学を志す者の論理的思考能力を鍛えるものでなくてはなりません。

周知の如く、**信心正因　称名報恩**は、覚如上人によって確立され、蓮如上人の御文章で頻用された御法義であって、親鸞聖人の御法義の構造を著しく狭めた懸念が残るからです。

◆ご讃題をそのまま頂戴してみましょう

ご讃題の第一文は、「**弥陀佛の本願を憶念すれば、自然に即のとき必定に入る**」であります。ここで「**憶念**」とは、通常、信心を指すと云われています。巻末註には「心におもいたもつこと。心に念じて忘れないこと。浄土真宗では、とくに阿弥陀仏の本願を信ずること。また、本願のいわれを聞いて心に保ち常に思い出して忘れないこととして用いられる」とあります（Ref 註釈

版聖典 P1467)。してみれば、聞思修の「思」を連想させます。

ところで、第十八願文の乃至十念の「十念」は、観念、憶念、称念とさまざまに解釈できると云われています(Ref①P156)。元来、サンスクリットの citta（心念）は、お浄土に生まれたいと十回心に思うことを指しますから、憶念がピッタリ来ます。

問題はここからです。

解説文では、どうしたことか信心獲得以降にしか視点が当てられていませんが、これは一体どうしたことでしょう。

讃文は、**「弥陀佛の本願を憶念すれば、自然に即のとき必定に入る」**とあるのですから、注意深く頂戴して見ますと、「弥陀佛の本願のおいわれを聞いて心に保ち常に思い出して忘れなければ、自然に即のとき必定に入る」と示されているのではないでしょうか。

「即のとき」というのは、第十八願成就文の**「即得往生」**（親鸞聖人は、今生では、これを**摂取不捨の利益**であると押さえて下さいました）を指していますから、**「聞其名号　信心歓喜」**のその時を指すと頂戴できます。

そうすると、ここでの「憶念」は、即のとき以前からのプロセスをも指し示していると窺うのが無理がないのではないでしょうか。

「自然に」というのは、凡夫のはからいではなく、阿弥陀如来の本願力が働いて下さっている有様を意味しますから、**「即のとき」**というのは、とうとう、煩悩成就の凡夫人がわがはからいから完全に解き放たれて、一点の疑いも雲散霧消して、如来様の仰せに頭が垂れるそのときであったと頂戴できるのではないでしょうか。

その有様は、得道の人たる妙好人の行状によってより具体的に頂戴できます。
因みに、妙好人の源左同行は、刈り取った草束を雌牛のでんの背中に「でんよたのむぞ」と乗せたとき、「フイッとわからせて貰うた」と述懐されました。

それまでの源左同行の歩みはどうだったでしょう。阿弥陀如来のご本願のいわれを聞いて心に保ち常に思い出して忘れないお聴聞の毎日であったことは疑う余地がありません。

◆称名をまたずに正定聚に住するのか

では、お聴聞によるお育ての途上、ずっと称名とは無縁なのでしょうか。

そのように捉えるのは随分無理なお話です。

源左同行に如来様のお慈悲をお取り継ぎ下さった和上様方は、如来様から賜る大行を我が身の上で行ずる**行業**（ぎょうごう）だとお勧めになったに相違ありません。称えつつ、聞こえて下さるお六字こそは、如来様のお喚び声に他ならず、お喚び声に聞き入るとき、凡夫は如来様に**聞遇**（もんぐう）させて戴いているのだとお勧め下さったことでしょう。

同時に、阿弥陀如来のご本願が何故に建てられたのか、そのご本願は成就したのか否か、成就されたお名号は、今や働き詰めに働いていて下さる**佛願の生起本末**を度重ねてお説き

下さったことでありましょう。

そうした長い間のお聴聞のお育てが実って、とうとうお同行の疑いの蓋が取り払われるそのときがやって参ります。

それが**即ちのとき**です。

かくして**「弥陀佛の本願を憶念すれば」**というのは、そうした長い間のお育てのお聴聞の道行きであったと頂戴するのが無理がないのではなかったでしょうか。

この間、阿弥陀如来の本願力（＝お名号）は、お同行の意識に上らずとも、ずっと働き詰めに働いていて下さったのであり、称えればお喚び声となって届いて下さっていたことは疑う余地がありません。

教学は、従前、報恩を専ら称名に押し込めてご覧になりますが、報恩の思いそのものは意業です。されば、信心獲得後は、唯単に報恩謝徳に留まらず、佛願の生起本末を味わいつつ、口業讃歎（くごうさんだん）のお念仏を通して、本願招還の勅命に頭を垂れて聞き入る聞思修の「修」を繰り返し実践せしめられている姿であると頂戴できるのではなかったでしょうか。

龍樹菩薩は、煩悩成就（※）の凡夫には、**信方便（しんほうべん）の易行**をお示し下さいました。これは、お念仏は、衆生が勝手に称える行業ではなく、如来様から賜った（※）ものだと頂戴して称えさせて戴くことを指しているかと頂戴できます。

その傍ら、龍樹菩薩は、あらゆる事物について、**「悉くよく有無の見を催破（ざいは＝打ち破ること）なさった」**のですから、「称名を待たずに」等と信心と称名に前後関係を設ける頂戴の仕振りは、寧ろ戒められているのではないかと窺われますが如何でしょうか。合掌。

※註**「煩悩成就（ぼんのうじょうじゅ）」「本願力回向（ほんがんりきえこう）」**は、天親菩薩の『浄土論』を龍樹菩薩の『易行品』の御指南の下に註釈を施す過程で、曇鸞大師が明かされた御法義であります。

（後書き）信心は、諸仏如来の名号讃嘆（称名）に疑いがないことを指し（第十七･第十八願成就文）、しかも凡夫の称名は本願力回向の行業（往生論註）なのですから、**“信心が前で称名が後だ”**としたのでは、**「その信心とは一体何か、どのようにすれば頂戴できるか」**とまじめなお同行は呻吟（しんぎん）なさることになります。ご讃題は、その疑問にお答えを示していて下さるのではないかと窺われますが、如何でしょうか。合掌。

◆正覚寺ご法話会　六月一日（日）二十時より
◆仏教婦人会例会　六月十六日(金) 十九時半より

著作編集兼発行元（本願寺派　正覚寺内）　〒520-0501 大津市北小松四五二番地
電話 077-596-0166、Fax077-596-0196 住職　堅田　玄宥